

## 心霊現象と W.ジェイムズ\*

Psychical Phenomena and W. James

三 橋 浩<sup>1)</sup>  
Hiroshi MITSUHASHI

### はじめに

科学の洗礼をうけているわれわれ現代人の大半にとって、いわゆる「心霊現象」なるものの存在性は一般的に疑問視されている<sup>1)</sup>。とりわけ、この「心霊現象」が、心霊主義者 (spiritualist) の主張するように、「人の死後、その人のものと認められる靈魂の直接的な現象及び活動」であると定義されるに及んでは、頑固な実証主義者になれば懷疑の念がおこって当然といえよう<sup>2)</sup>。ところが心霊主義者にすれば、心霊現象及びそれを信じて検証を行なおうとする自分達の行為は確固たる信念に基づいているものであり、それをインチキだとみなし嘲笑している数多くの事実は耐えがたい誤解に基づくものである。彼らはそういった事実の担い手に対して、どういうものか、直接的には反論を加えない寛容さをもつのであるが、そのかわり一種の開きなおりを行なっている。すなわち、彼らを嘲笑している人達は、はたして真の科学の洗礼をうけているのだろうか、あるいは科学の洗礼をうけていたとしても、ごく狭隘な科学的世界に固執する「時代遅れの人達」ではなからうか、といった具合にである。なぜなら、一昔前の唯物論者や科学者だけが頑固にも人間存在を単なるものとみるになんらためらってはいなかったと彼らは考えているからである。

人間存在が単なるものではない生命現象であるとする最近の認識は、現代人が一つの反省期に入っている証左である。そうかといって、心霊主義者が人間の存在形態の中に、肉体とともに、「エクトプラズム (心霊体)」なる実体の存在を公認してはばからなくなったのは、やや唐突の観がある。それでも今日の心霊主義者がこのエクトプラズムを信仰の対象としてではなく、科学の対象として把握しようとする探究心は、彼らを等しく心霊研究者 (psychical researcher)<sup>3)</sup>と呼称せしめるほどまでの力を与えているのも又事実である。論者は今のところ心霊主義者でもなければ心霊研究者でもない、数々の事実を紹介された後でもエクトプラズムの存在性については判断中止 (エポケー) の状態にある。それ故に、「世界の心霊科学研究者がほぼ一致して認めている」 (と心霊科学研究者の中岡俊哉氏が力説するところの) 心霊現象に関する以下の十項目の基本認識についても判断中止のままに論をすすめたいと思う。

① 肉体の死後、人間は靈魂として生存しつづけ、意識的活動をつづけることが可能である。

② 人間の霊は、稀薄な一種の幽体 (エクトプラズム) を備え、だいたいにおいて生前の形態を保っている。

③ 右の幽体は、一種の実質と一定の重量とをもっており、適切なある方法を講じれば、これを目撃することもでき、また写真に撮ることもできる。

④ 霊は生時においても、肉体の内部に存在するひとつの有機体であって、脳髄、神経、血管、心臓などをもっている。

⑤ 肉体の死後において、霊の居住する世界は、地球を包囲する幾層かに分かれた霊界である。

---

\*昭和58年3月1日原稿受理

1) 大阪産業大学

⑥霊魂と人間とのあいだにいろいろな方法でコミュニケーションを保つことが可能である。

⑦人間の霊は、生時においてある程度までその肉体を離れ、霊界の探検を行なうことができる。

⑧物質の世界と霊の世界とは、密接な有機的關係をもっており、厳密な因果律によってしばられている。

⑨物質と霊とは、一般的に考えられているように、根本的に違うものではなく、むしろ同一の根元から出発しているものである。

⑩心霊作用は人間の肉体その他の物質のうえに驚くべき力を発揮することが可能である<sup>4)</sup>。

長文の引用になったが、この十項目の基本認識は本稿をすすめていく上にたえず想起されねばならない背景となっている。われわれは、たとえそれが唐突な観を与えようとも、心霊研究家が確固たる信念のもとで、検証しようとしている事実を忘れてはならないのである。

ところでここで注意されねばならないのは、心霊研究家が学問的にエクトプラズムの検証を行なったとしても、その視点は純粹の哲学的なそれ、あるいは純粹の心理学的なそれとは異なっているという点である。いいかえれば（論者の思い違いかもしれないが）、彼らはエクトプラズムを、究極的には、精神あるいはその作用の変容されたものであるとか、意識あるいはその作用の変容されたものであるとかみなさないで、彼らなりの科学的なカテゴリーで構成されているものと理解しているように思えるのである。しかし論者の覚える唐突の観も、論者が自然科学畑の人間ではなく、人文科学畑の人間であることに起因しているのかもしれない。彼らの検証のための絶えざる努力が、学問的厳密さの程度がどのようなものであれ、心霊現象に対する偏見なき判断に基づいているとするならば、同時代のわれわれとしては、それに対して謙虚であるべきかもしれない。それ故にエクトプラズムの存在性をただ一方的に否定する態度こそ、これまでの科学的態度の悪しき習性であり、それがこそ、みなおされるべき時であると、われわれは認識しなければならないのかもしれない。

以上の観点から、頑固な心霊主義者でもない論者が心霊現象に唐突さを覚えることなく、それを前向きの姿勢で理解しようとするには、魂の不死を要請する哲学、あるいは識闕下の合理的存在性を唱える心理学を糸口にするのが最も賢明な方法であるように思えた。しかし本稿ではそれらの問題を直接的にとりあげないで、その予備的段階として、ウィリアム・ジェイムズという一人の思想家の考え方を紹介したいと思う。論者が以後の論述において、彼の考え方を中心にしてすすめるのは、近代的精神の持ち主としてのわれわれが心霊現象を理解する上において、彼が文字通りの媒介者 (medium) であるとみるからである。

## I

誰よりも経験論的立場に立とうと心がけ、それ故にヒュームをさえ克服しようと呻吟したプラグマティズムの普及者として知られるジェイムズが、実は神秘的な対象である心霊の研究に関心を払っていたということは、きわめて特筆すべき事実であろう。この最初の科学的心理学者といわれ、且つ哲学者でもあるジェイムズに、一体、どのような思想的野心がうごめいたのだろうか。否、そこには彼の一貫した学的態度があらわれていたのであり、単なる趣味であったというにはあまりにも軽々な、事実の重みに対する賛美があったというべきであろうか。論者の思うに、そこには（そしてヘーゲルのいいまわしをまねれば）最も現実的なものは最も神秘的であり、最も神秘的なものはある意味では最も現実的であるとする確信があったのではなからうか。ジェイムズにとっては、現実とは自明なものであり、且つわれわれとともにあるものであるのであるが、そのことでもってわれわれが現実を知的に理解したことにはならないのである。それ故に事実 (fact) は常に事実の神秘として了解されねばならなかったのである。

実際のところ、このような考え方は論理的には導出され得ない性質をもっており、ヘーゲルのいう

弁証法が形式論理学の領域をこえてたものであるという考えが正しかったとするならば、多分に弁証法的でさえある。そしてジェイムズの考えに即していうならば、この考え方は論理をこえるビジョンの問題に帰された彼固有の学的態度の表明であったのである。そして、そこから逆の考え方、すなわち神秘的なものといえども事実に対する尊敬の念を失わないならば、それを現実的 (real) なものとして受け入れるという考え方が生まれてきているのである。

さて、ジェイムズが心靈研究の分野でも中心的役割を果たしていたということは、彼の業績からも容易に判断せられる。たとえばジェイムズは一八八四年から八九年の五年間ロンドンの「心靈研究協会」の通信会員であり、それ以後死ぬまでその協会の副会長をつとめ、なかんずく一八九四年と九五年の二年間はその会長にまで就任している<sup>5)</sup>。又ジェイムズの論文の中にも心靈現象の学問的考察を意図している論文が数編ある。中でも『心靈研究がなしとげたもの』（『信ずる意志』に収録）、『心靈研究家の決定的印象』（『追想と研究』に収録）及び小さな単行本になっている『人間の不滅性』はその代表的論文といわれている。ジェイムズのかかる活動は、G・マーフィの言によれば、結局、心靈研究一般に対する四つの重要な事柄となって示されている。一つは、ジェイムズが心靈研究に対して一つの知的社会的地位を与えたことである。二つは、彼のアメリカにおける公的な心靈研究の基礎づけに重要な役割を果たしたことである。三つは、パイパー夫人という一市井の人間の中に異常な靈媒力を発見したことである。周知の如く心靈現象の典型は死者とのコミュニケーションである。それは死者の意思のある生きている人間（靈媒者）をして伝えさせるという儀式の方法によって具体化される。ジェイムズはこの靈媒者の行動形態が通常のわれわれにとっては確かに異常であるようにみえるが、しかしながらそれはわれわれの世界における一つの事実であるということを市井の一夫人の存在によって例証しようとしたのである。四つは、理解不可能であるようにみえるものが、どうにかすれば直面せられ、考え通され、そして相関係せられるに違いない時に、諸事実の厳粛な直面者が仮定するに違いないところの心的態度に関する一つの「根本的経験論」を示したということである<sup>6)</sup>。

このマーフィの主張でもあきらかなように、ジェイムズの心靈現象に対する興味は決して趣味的なものではなく、彼の哲学と密接につらなっていたとみるべきであろう。彼の哲学については拙著『ジェイムズ経験論の諸問題』（法律文化社）で多少なりともあきらかにしているので、ここでは言及しないが、今、論者の懸念するのは、ジェイムズの真摯な意図が、それにもかかわらず、表面的な次元でうけとられ、単なる好奇心のなせるわざにすぎないとみなされはしないかという点である。事実、マーフィも先程の四点から次のような考え方を導出する。「ジェイムズの実事に対する休みなき激しい探究ないしはもっと広く新しい経験に対する彼の探究は、その時代のアメリカの思想のきわめて特徴的な精神のパイオニアの素直さと粗野さの反映としてあらわれている<sup>7)</sup>」

勿論われわれはこのマーフィの指摘を誤まっているとする何の根拠もってはいない。それは事実であるし、ジェイムズの心靈研究についての正しい評価でもあるといわれよう。しかしジェイムズの根本思想に触れてきた者であるならば、ジェイムズの心靈研究が彼の根本思想の現実的証左ないしはその応用であるに違いないと判断し、そこから心靈現象が一つの経験的事実として彼の哲学的思索の対象にされざるをえなかったという風に理解するに違いないであろう。

以下、論者はそれをあきらかにしようと思う。まずジェイムズによって、心靈研究は「科学の重要な部分<sup>8)</sup>」（傍点は論者）であるとみなされている点あげられる。この考えは、エクトプラズムの存在を信ずる心靈主義者のその如く、ジェイムズの信念の表明にすぎず客観的事実を示すものではないかもしれない。従ってこの考えを他人に押しつけるということはジェイムズ自身も考えていない模様である。しかしながら心靈研究が個人の体験実例によって具体的になされるという事実から、それが科学的に考察されえないときめつける理由はなにもない彼は考えているのは確かである。それでは彼の心情の中においてなぜに心靈研究が「科学の重要な部分」であるとされるのだろうか。それ

は心理学が心的生活の科学であるといわれるように、心霊研究がある意味で心的生活（たとえそれが心的現象の神秘的な性格をともなっているとしても）の一つのあるいは複合した現象及びその現象の条件を考察の対象としているからである。だがこれとても心霊研究が科学そのものの中に包摂されるということをきめつけるに不十分である。むしろここでは心霊現象が科学的態度でもってとりあつかわれうというのが適切な理解の仕方であろう。この際科学的態度とは具体的には何をさし示すのだろうか。それはいかなる現象といえども偏見なく事実を事実としてうけとる態度の意であり、その事実が神秘的である故をもってそれを追求することが非科学的であるとしてはいけないということである。（その意味では、かの心霊研究者といえる人達の態度とは一致しているかもしれない。）われわれにとって神秘的なものに対して、はじめから科学的にみようとす態度を放棄する傾向がある。それは神秘的なものが存在の自明性を欠いているからである。<sup>9)</sup>だが存在の自明性を欠くからといって、神秘的なものに対して偏見をもってよいということにはならないのである。そこでまずジェイムズは次のように判断する。「一般的に神秘的とよばれる大部分の現象ほど侮辱的な科学的無関心 (scientific disregard) でもって普通とりあつかわれている未分類の残余の部分はない<sup>10)</sup>。」この裏の意味はあきらかである。神秘的なものほど科学的関心でもって、そして事実を事実としてみる態度でもってとりあつかわれるべきだということである。

だがジェイムズはこういった考え方にのみ基いているのではない。彼には一つの哲学的な視点が洞察されている。それが前述のように、平明な事実であれ、神秘的な事実であれ、事実そのものが神秘の実在であるという認識である。ジェイムズはかかる認識にたつて、さらにそれ以上に、神秘的な現象そのものの中にこそ事実の本質がかくされているのではないかと考えた。それが彼をして心霊研究に本格的にとりかからせたのである。

その橋渡しの役割をはたしているのがジェイムズの宗教観であるといえるのではないだろうか。実は宗教的経験の本質とはわれわれが他の場所では出会うことのできない宗教的経験の中のある要素ないしは性質なのである。「そのような性質は勿論、最も偏った、最も激しい宗教的経験の中において最も顕著であり、気づきやすい<sup>11)</sup>」とジェイムズはいう。このジェイムズの主張は事実を事実としてうけとるある意味での消極性をともなった科学的態度から積極的なそれへと移行する心の変化を示しており、自らの意志でもって事実をみきわめようとする姿勢をあらわしている。そしてこれらの性質に神秘的な特徴が付加されたものとしての心霊現象は、まさに心的生活の本質を端的にあらわしていると彼には思えたのである。それ故、ジェイムズのいう個人的宗教的経験と心霊現象は意識の神秘性が問題にされているという意味において、そしてその神秘性が知的に解明されえないで、われわれの生の直接的事実のあらわれであるという意味において不可分の関係にあると判断されたのである。

## II

次に心霊研究はジェイムズの宇宙観、世界観を説明するのに最もよく貢献しているとみられるふしがある。もともとジェイムズの有限主義的な哲学においては、たとえば真理の問題にしても、真理はわれわれの実際的な精神がその全体を知るにはあまりにも大きすぎるものとして考えられているし、又生をもつわれわれ自身の存在も「大海の中の孤島、森の中の木のようなもの<sup>12)</sup>」であるから、われわれがその無限ないしは全体の像をそう簡単には把握できないことが幾度となく力説されている。そしてその上にジェイムズはわれわれ自身の生活の外側にあると考えられる対象を内的に経験的な性質に帰属させる、いわゆる汎心論的な考え方を支持しているために、すべての問題をわれわれの意識の問題の観点から考察しようとする傾向がある。これらの考えを結びつけた場合、ジェイムズの考え方の典型的なものは、次のようになってくる。「われわれの『正常な』意識はわれわれの外的な

地上の環境への適合のために外接せられている。しかしその壁は個々の点において弱々しく、かなたからの発作的な影響がもれてきて、別の検証しがたい共通の結合を示している。<sup>13)</sup>あるいはジェイムズの別の言葉を引用させてもらえば、一般的には、次のようになる。「この世の経験を構成するいわゆる自然の秩序は全宇宙の一つの部分にすぎないし……この可視的世界のむこうにはわれわれが積極的ななものも知らないが、しかし現在の人間の生活の真の意味が関係しているみえない世界が広がっている。<sup>14)</sup>」われわれはこれらの考えが、一言でいえば、われわれの意識はより広い霊的環境と連続している、というテーゼを導きだしているのを容易に察知できるであろう。

だが他方、そこにはわれわれが注意せねばならない点がある。正常な意識ないしは意識的自己が、異常で神秘的なものないしは見えない世界と連続しているということは、ジェイムズの経験のとらえ方からは一応認められたとしても、そこから次のような問題が生じてきはしないだろうか。心靈現象を認めるということは、死後の意識を認めるということである。それ故前者の考えから後者の考えを導出するのは飛躍ではないだろうか、という問題である。前者の考えは彼にとっては生の次元に還元された問題であり、従って神秘的なものを潜在意識的なものかという生ある存在の一つの様態と理解しても何の不思議もおこってこない。しかるに後者の場合は生と死を連続的なものとしてとりあつかおうとするだけに無理が生じる。すなわちジェイムズが生次元にたっている限りにおいて、心靈現象は彼の論理的観点からは不可能とみなされなければならなくなってくるのである。そこで問題になるのは、そもそもジェイムズは死後の世界を実在的なものとしてみなしていたのであろうか、であり、ジェイムズの信ずる意志は死後の世界をも実在的たらしめることができるのであろうか、である。

結論的にいえば、ジェイムズはひかえめながらも死後の世界の存在を信じていたようである。呑むしる死後の生活の存在を他の哲学的仮説同様に一つの仮説として採用し、間接的ではあるが彼の著である『宗教的経験の諸相』や『多元的宇宙』の中でそれを訴えていたともいえるであろう。ジェイムズはそこにおいて、われわれ自体からはなれ、宇宙の中にあるより大きな意識というものを想定し、われわれの小さな意識は死後にはそこにたち戻るといって信じていた。ジェイムズのかかる信念は、他方宇宙に永遠の意識が不動的に存在していることを認めているという意味において、純粹に哲学的な論述のニュアンスとは異なっている。しかしながらそれが何であるかについての知的探究を放棄しているために、実体としてあきらかにされてはいないし、そのことについて、ジェイムズ自身重要な問題だと考えていない。とはいえこのジェイムズの態度は機能主義的なあるいはプラグマティックな考え方に起因しているのであり、その点は実体論的な合理論的な考え方に基かないのであるから、われわれはそのことについてとやかくいえないのかもしれない。いずれにしてもジェイムズはそこから人間の不滅性を導出しようとするのである。

### Ⅲ

それはいかなる考え方に基いているのであるか。人間の不滅性とは、端的に言えば、われわれの脳髄が存在しなくても、考えないしは意識は滅びないということである。この考え方は勿論人間の不滅性を示す一つの考え方であり、心理学を学んだジェイムズにとってはふさわしい規定である。われわれはこの観点にたつてジェイムズがどのようにして意識の不滅性を信じていたかをあきらかにしてみよう。まずジェイムズにとつても「考えは脳髄の一機能であった<sup>15)</sup>」。しかし脳髄の一機能であるということは一体何を意味するのであろうか。たいていの心理学者や生理学者はその機能を生産的機能としてのみ考えている、とジェイムズは考える。これは一般的に唯物論的な考え方の人によく認められる考えである。その考え方に従うと、必然的に以下の結論が導かれざるをえない。すなわち脳髄が意識を生産している限り、脳髄の死とともに意識も生産されなくなる、という結論である。従って

「考えは脳髓の一機能である」というのは、「蒸気は湯わかしの一機能である」ないしは「光は電気回路の一機能である」という場合に意味されているのと同じ内容をもっている。なぜならば蒸気ないしは光は、湯わかさないしは電気回路によってある結果をつくりだされたものとして考えられるからである。その場合、極端に言えば、脳髓は「コレステリンやクレアチンや炭酸ガスを生じさせるのと同じように、その内部において意識を生じさせる<sup>16)</sup>」と考えられているのである。

しかしながら、ジェイムズは物理的自然の世界においてこの種の生産的機能だけがあるのではないと考える。なぜならばそこには「解放的あるいは許容的機能や転移させる機能」も認められるからである。たとえば石弓の引き金は解放的な機能をもつ。それが弓糸をこらえている障害をとり除くと、弓をその自然の形につれもどす。色ガラス、プリズム、屈折レンズは転移的な機能をもつ。光のエネルギーはどのように作りだされるにせよガラスによって色がふるい分けられ制限されるし、レンズやプリズムによってある通路と形へと決定される。ジェイムズはかかる自然の世界の実例をあげながら、脳髓にもそのような機能の存在を認めようとする。「われわれが、考えが脳髓の一機能であるという法則について考える時、生産的な機能のみについて考える必要はない。われわれは許容的ないしは転移的機能 (transitive function) をも考慮する資格をもっているのである<sup>17)</sup>。」

これは何を意味するのか。たとえば脳髓が転移的な機能であるとされた場合、現存する意識はどこかある存在から伝達されてきた、と考えられるのである。さすればこの意識は、丁度プリズムがなくとも光は光として存在するように、脳髓がなくとも存在するといわれねばならないのである。このアナロジーがはたして死後の世界におけるわれわれの意識を最終的に保証しているかどうかは疑問である。それはただ死後の世界の意識が不滅の意識としてあるらしいということを伝えるだけであり、その表明の根拠をもともなっているわけではない。そしてわれわれが脳髓の転移機能説を認めることによって、最大限の好意的な理解をするならば、われわれの魂の生とは脳髓の機能にすぎず、精神はそれに依存することを認めた上で、それでも「この自然生活にとってそのような脳髓への依存は決して不死の生を不可能にしないし…そのことは来世においてベールの背後にある超自然的な生と全く矛盾しないであろう<sup>18)</sup>」という表明を認めるぐらいのものである。だがこれとても例の「証拠がなければその存在を信じることができない」とする主知主義（厳密には実証主義）の立場からみれば、ただちに否定されるべき性質のものであるが、しかしながらジェイムズの基本的立場にたつて考えれば、彼の一つの哲学的帰結であったのである。

たしかに、脳髓の転移機能説はそのはっきりした証拠を示しているとはいえず、脳髓がどのような機能をもっているかについての一つの説明をしているにすぎないのであるが、ジェイムズにしてみれば、現実の生を考える上において、生産機能説よりも転移機能説の方がより実際的な効果を与えていると考えられたのである。論者の思うに、この転移機能説はジェイムズの哲学である「プラグマティズム」によって精神的に支えられているとも判断されるのであるが、彼自身は別な形でこの説を採用する利点をあきらかにしている。すなわち意識が舞台裏ですでに世界と同時代的にあるという一般的な観念論的哲学とつながっている点、心理学でいう「闕」の問題とつながっている点、その結果生産機能説では説明できない心靈現象などの諸現象が合理的なものとして説明できる点などである。

この指摘は不滅の意識の存在を媒介にして心靈現象の合理性をわれわれに納得させようとするこじつけのようなものとうけとられかねないが、このことに関していえば、ジェイムズにとって心靈現象そのものの有価値性が問題になっているのではなく、それを彼なりの理屈でもって名誉回復することによって、現実的な生のボルテージを高めることが問題であったと論者は理解したいのである。その意味でジェイムズにとっての不滅の意識の存在の確信は、それを信じることによってわれわれになんらかのよりよき実際の結果がもたらされているとするジェイムズ独特のプラグマティックな信念に根拠づけられているのである。あるいは心靈現象の価値も又いかにそれが生じるかという方面から定義

されるのではなく、なにがえられるかという方面から定義されているのである。

#### IV

結論的にいって、われわれはここにおいてジェイムズの考えの一つの特徴をみる。ジェイムズが心靈現象に関心をもっているのは彼の学問的姿勢からである。彼がこの問題に興味を示しているのは、「科学におけるスポーツマン的なフェアプレーに対する彼の愛によって<sup>19)</sup>」なのである。従って、ジェイムズは心靈現象そのものに対して直接的且つ積極的に結論を下している、というふうには論者には思えないのである。彼はただ心靈現象という間違いもなく存在している（と彼が確信している）事実のもつ意味を軽々しくはうけとらなっただけであり、その事実を契機にして生まれてくる人間の不滅性の考えがわれわれの生にとって一つの有効的な仮説であることをいっているだけである。そしてその仮説が真理そのものであるかどうかは将来の問題にまかせられていると彼は考えていたのである。だがその仮説が実際的な世界では一つの真理性をもっていることは彼の真理論からも察知されるだろう。われわれはジェイムズが心靈現象に関心をもっているというただそれだけの理由で奇異の目を向ける必要はない。なぜならば心靈現象とは人間的経験の一つの姿であり、超自然的様相をもったきわめて異常な現象であるが、それでも人間によって経験せられない超越的な現象ではないからである。ある意味では、人間の不滅性を保証する対象、すなわち靈魂とは、ジェイムズにとって丁度宗教的経験においてわれわれが想定するところの神のようなものであるといってもよいだろう。

もっとも、それはジェイムズが思いうかべる神ではある。ジェイムズにとって神とは全く人間的なものなのであり、われわれの経験の対象以外のなにもものでもないことからすれば<sup>20)</sup>、この靈魂も人間の生を鼓舞するもの以外のなにもものでもないと考えるのは容易であろう。それ故われわれはここで冒頭においていかめしく主張したところの、心靈現象が神秘的なものであるという考えを撤回しなければならなくなるだろう。なぜならば心靈現象はあきらかに経験的事実であるからである。しかし逆に心靈現象が神秘的であるとするのならば、ジェイムズの本音でもあるところの事実そのものを神秘とする考えにたたねばならなくなるであろう。いいかえれば心靈現象が神秘的であるというのは、事実そのものが神秘的であるという意味において正しいのである。実際のところ、われわれはこの内のどちらかに基かなければならないわけであるが、これら二つの考えは相反するものではなかったのである。

このことは何を意味するのであろうか。心靈現象は知的には不可知な現象であるという意味においては神秘性をもつかもされないが、われわれの信念と結びついた一つの実在の対象でありうるという意味において神秘的でもなんでもなく、むしろそれらの現象がわれわれの心的生活の特殊な要素をうきばりにし、普通の状態ではあきらかにされない事実の本質を示してくれるという意味においてわれわれに実在的なものであったのである。

以上の論述からもあきらかなように、ジェイムズの心靈現象に関する考え方は彼の宗教に対する考え方と同じ思考パターンに従っている。宗教が個人的体験にうらうちされた「生に対する人間の全体的反応<sup>21)</sup>」であるように心靈現象は人間の心的生活の誇張された部分であるが故に、生の躍動性を最も端的に示している一つの反応である。宗教が自分自身の危険をかけて自らの生の充実を意図するかわりに、他のなにもものによっても干渉されえないように、心靈現象もそれを体験する人以外の人間によって単なる神秘性の故をもって無視される必要はないのである。いいかえれば心靈現象をみる能力のない者としてのわれわれであるならば、それに寛容的に接しなければならないとジェイムズはしているのである。

ここからわれわれはどう考えるべきであるのか。なるほどジェイムズは彼の心理学的能力を駆使して、一応死後の世界におけるわれわれの意識すなわち不滅の意識の存在について認めようとする努力

をしている。だがいかにその努力が報われようとも、その意識が客観的な存在として現実のわれわれの意識の中に保証されていると判定されえないのも事実なのである。そうであるならば、むしろそれにもかかわらず、なぜにその努力をなすのであるかという人間の心情の問題に還元したとらえ方の方をわれわれは重視すべきであろう。この心情の現実的なあらわれが心靈現象に対するわれわれの素直な態度となっているとみなされるべきであり、それは、われわれが祈らざるをえないから祈るのであるというジェイムズの祈りについての考え方と同様に、人間的な生活にとって実際の価値をもっているのである。そしてわれわれが心靈現象を体験しなかったとしても、われわれはそれについてジェイムズの考える以下の観点にたって対処すべきであろう。「存在の心はわれわれの貧しくて狭い心が示すような拒絶の考えをもつはずがない。他の生命の内的意義はわれわれのあらゆる共感と洞察を凌駕する。もしわれわれがわれわれ自身の生命の中にその永遠性を自発的に要求させているところの一つの意義を感じるならば、他の生命によってなされる同様の要求がいかに多く、またいかにわれわれにとって非理想的にみえようとも、少なくともその要求に寛容的であろうではないか。われわれはその根拠を全く感じることでできない異なる要求について都合よく決定することができないが故に、その根拠をわれわれが直接的に感じるところのわれわれ自身の要求に対しては、とにかく逆の決定をしないでおうではないか。」

#### おわりに

さて、われわれはウィリアム・ジェイムズの考え方を紹介しながら、心靈現象に関する一考察を行ってきた。もとより心靈主義者にすれば、これまでの論述は納得いかないばかりか、冒瀆の観さえ覚えるかもしれない。なぜならば、本稿が心靈現象を積極的に認めるなんの実証も行っていない上に、心靈主義者に寛容的になり、彼らの好きなようにさせておけばよいとも考えているかのような傲慢さを感じさせかねないからである。たしかに、本稿には論者の先入観と未熟性があって、報告や観察による間接的体験しか素材とされていないことにもよるのだろうが、心靈現象が、あるいはエクトプラズムが直接体験されたならば、論者のジェイムズ論もかわっていただろうことは確かであろう。その意味では論者も又悪しき実証主義のタガをはめられているのであるが、エクトプラズムの活動が心靈主義者の世界でのみ通用し、仮にそれが実体として存在すると思われたとしても、それが芸術や哲学の世界で様々な呼び名でいわれ理解されている事実を思いおこしたとき、論者のような立場からのコミットも許されるのではないかと思う。そして本稿を終えるにあたって、論者がばくぜんとした形で結論づけたテーゼを加えてみようと思う。それは、ドイツの哲学者カントが人間の理性を批判して魂の不死を要請したあの心的構造と、心靈主義者が心靈現象を検証しようとする心的構造とは全く同一のものからなりたっている、ということである。

#### 注

1) とはいえ、「心靈現象」に関する学説は無数にある。たとえば、ジェイムズの理解者であり且つ日本の心靈研究の先達である福来友吉博士は、その代表的なものとして心靈主義、秘力主義、神秘主義をあげる。心靈主義は靈魂不滅説をとえ、秘力主義は Metapsychism ともいい「普通の精神の奥に潜み居る不思議の力」を認める立場に立ち、神秘主義は宗教的神秘意識のある種の認識能力を重視する。しかし本稿においては、これらについて厳密に区分して考えられておらず、随意、文脈に従ってとりあげられている。

2) とりわけ医学的唯物論者は次のようにいうだろう。「ジョゼフはジョゼフであった。頸動脈を切られて血がなくなった。そこでもうジョゼではない。」(F・グレゴワール『死後の世界』、渡辺照宏訳、白水社、p.12)

3) 今日では心靈現象が超常現象の一つとしてさらに科学的にとらえられ、超心理学の重要な研究対象にもなっているという意味で、心靈研究家を超心理学者 (parapsychologist) と呼んでもなんら不思議ではなくなっている。

4) 中岡俊哉『死後の世界を見た』, 二見書房, pp.168~169 ついでながらいえば, 心霊現象といわれるものにはいろいろあるので, この著者の言明のみに従うわけにはいかないことは論者も了解している。しかしこの著者の言明は直截的であいまいさがないという意味で論者の論述上, 最も効果的な素材となっている。

5) この有名な協会は一八八二年に最初の科学的意図でもって設立された権威ある組織である。恥かしくも論者はそこから出ている会報をつぶさには読んでいないのでコメントする資格はないのであるが, 後述のジェームズの『心霊研究がなしとげたもの』によれば, その目的は二つあり, 「一つは, 催眠現象の問題, 霊媒, 透視その他に関する体系的実験を行なうことであり, 二つは, 幽霊, 幽霊屋敷および偶然に報告されるが, そのほかない性格から入念なコントロールをする余地のない類似の諸現象に関する証拠を集めること」(W. James; The Will to Believe and Essays on Popular philosophy, Dover, 1956(abbr. W.B.), p. 304) であるという。

6) G. Murphy & R. O. Ballou; William James on Psychical Research, The Viking Press, 1960 (abbr. James on P.R.), pp.327-328 尚, 同書には本文に紹介した三論文の他, ジェームズの心霊現象に関する著述, 書簡が多数収められている。

7) James on P.R., p.328

8) W. James; Memories and Studies, Greenwood, 1968(abbr. M.S.), p.195

9) ここで存在の自明性といわれるものは明らかに主知主義によって権威づけられたものである。前述の福来友吉博士は『心霊と神秘世界』の中でかかる主知主義を次のように批判して自説を展開する。「理知主義(主知主義)の謂ふ認識なるものは人間の霊のほんの上皮の浅薄なる働きにすぎぬ, 精神統一して三摩地に入ると, 神秘智が働き出して認識以上の認識をする。即ち眼によらずして一切を見, 耳によらずして一切を開き, 手を延ばさずして物に触れるという神通の働きをなすのである。それで理知主義の認識論から見て認識超越の不可知の世界も神秘智から見れば可知の世界である。明目者が盲目者の全く知らぬ世界を見て居るやうに, 神秘智を得た人は理知主義の認識論者の全く知らぬ世界を認識しているわけである。」(p.2)

10) W. B., p. 300

11) W. James; The Varieties of Religious Experience, The Modern Library, 1929(abbr. V.R.E.), p.45

12) M. S., p.204

13) ibid.

14) W. B., p.51

15) W. James; Human Immortality, Dover, 1956(abbr. H.I.), p.10

16) H. I., p.13

17) ibid., p.15 尚, 附言すれば, この考え方はジェームズの「多元論的宇宙観」の応用されたそれといえる。ある事実の一元論的解釈はそれの实在性を真に伝えてはいないし, その解釈にこだわると必ず破綻が生じるとするジェームズの信念のあらわれでもある。

18) ibid., p.18

19) W. B., p. xiv

20) 誤解をおそれずというならば, ジェームズにとっては神は人間に利用されるために存在するにすぎないのである。「普通の人間の宗教的生活においては『神』は事物全体の名前では断じてない。それは自分の目的に協同しようと呼びかけ, その目的が価値あるならば, われわれの目的をおしすすめてくれる超人として, 信じられた事物における理想的傾向の名前にすぎないのである」(W. James; A Pluralistic Universe, Longmans, Green, 1909, p.124) と彼はいう。

21) V. R. E., p. 35

22) H. I., pp. 44-45

## 付 記

本稿を作成するにあたり, 注にはジェームズの著書を除いては四点の文献しか記載していないが, 心霊主義者, 心霊研究家あるいは超心理学者の数多くの文献のお世話になっている。あきらかに本稿は彼らの考え(霊とでもいふべきか)を地平にもっているのである。